

# GLC

GLOBAL LEADER COURSE MAGAZINE



# 3

## 9期生紹介

工学部、理学部、文学部、法学部に所属するグローバルリーダーコース第9期生の紹介。



# 5

## 国際教育

英語で行われる授業から課外活動に至るまで、グローバルリーダーコースの学生は多様な国際教育と研修を受けています。



# 7

## 海外留学

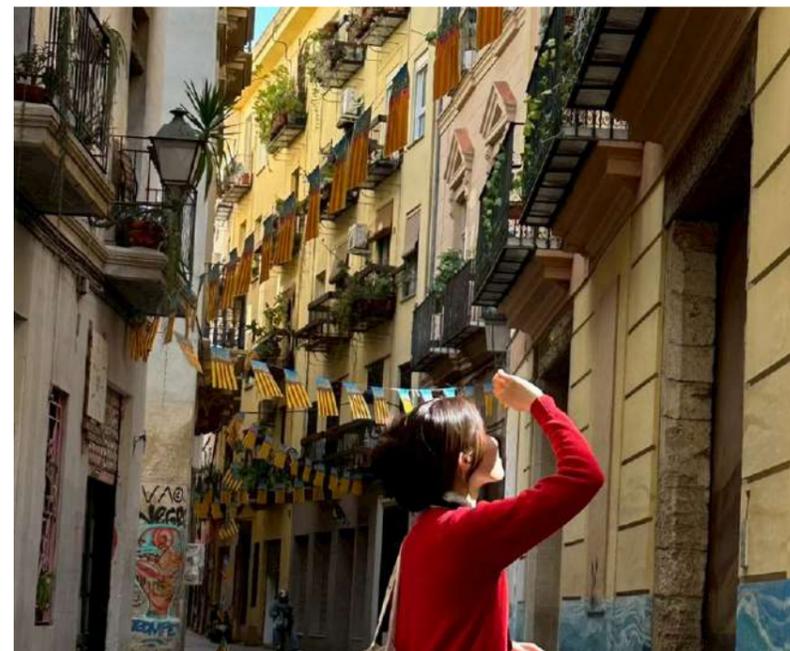
将来のキャリアに必要なスキルを身につけるためには、海外留学の経験が重要です。グローバルリーダーコースの学生によるアイルランドでの留学体験をご紹介します。



# 9

## 海外研修

たとえ短期間であっても、海外留学は視野や異文化理解に大きな影響を与えます。フィリピンやスペインでのプログラムに参加したグローバルリーダーコースの学生の体験をご紹介します。



熊本大学のグローバルリーダーコース(GLC)は、単なる教育プログラムではなく、一つの「姿勢」を育てる場です。GLCの学生は、英語で行われる授業や国際協働型学習(COIL)、多様な背景を持つ学生や専門家との交流を通じて、教室の枠を超えた学びに取り組みます。これらの経験は、語学力の向上にとどまらず、異文化の中で考え、伝え、行動する力を養い、複雑なグローバル社会を自信と柔軟性を持って生き抜く力を育てます。

同時に、GLCでは実践と協働を重視しています。国内外でのフィールドワークを通じて、学生は学んだ知識を現実社会の課題と結び付け、主体的に考え行動する力を身につけます。また、セミナーやプロジェクト型活動を通じて、チームワークやリーダーシップ、課題解決力を高めていきます。GLCの学生であるということは、自らの成長に挑戦し続けること、そして地域から世界へと主体的に関わっていくことを意味します。

グローバルリーダーコース第9期生は、工学部20名、理学部9名、文学部10名、法学部11名の計50名で構成されています。





# 国際教育

熊本大学のグローバルリーダーコース学生に提供される国際教育経験は多岐にわたり、英語で行われる教養教育科目の履修から、リーダーシップやチームワークに関する週次セミナー、さらには国際的な視点から地域で変革を推進している人々と直接関わる地域フィールドワークまで含まれています。

## MULTIDISCIPLINARY STUDIES

熊本大学のMultidisciplinary Studies科目では、複雑なグローバル課題を複数の学問分野の視点から考察する機会が提供されます。特定の専門分野に限定せず、社会科学、環境学、経済学、文化研究などの知見を横断的に取り入れながら、持続可能性、公衆衛生、社会的不平等といった現代的課題を扱います。英語で行われる講義やディスカッションを通じて、学生は多角的に問題を捉え、分析する力を養います。

また、これらの授業ではアクティブ・ラーニングと協働が重視されています。ディスカッションやグループワーク、課題解決型の活動を通じて、学生は分野を越えて知識を結び付け、それを実践的に応用する力を身につけます。異なる専門や背景を持つ学生と協働することで、新たな視点を得るとともに、複雑な考えを分かりやすく伝える力も高められます。Multidisciplinary Studies科目は、柔軟な思考力と批判的思考力を育み、現代社会の相互に関連する課題に対応するための基盤を築きます。

## GLC FOUNDATION SEMINAR

Foundation Seminarは、GLCの学生にとって出発点となる科目であり、学修面・人間的成長の両面において基盤となる力を養います。ディスカッションを中心とした双方向型の授業を通じて、学生は英語で自分の考えを発信する自信を高めるとともに、グローバルな課題や多様な視点に触れていきます。本セミナーでは、スキルの習得とマインドセットの形成の両方を重視し、批判的思考力やプレゼンテーション能力、協働的な学びの姿勢を身につけます。また、学生同士のつながりを深め、コホートとしての一体感を育む場として、グローバル人材への第一歩を支えます。



## YAMAGA

山鹿でのフィールドワークプログラムは、GLCの学生にとって、地域社会と直接関わりながらグローバルな視点を地域課題に応用する貴重な機会となりました。YAMAGA BASEを訪問し、地域活性化や持続可能性、文化の継承といったテーマについて学びながら、地域の方々と交流し、日本の地方が直面する現実への理解を深めました。留学生との混成グループでの活動を通じて、学生たちは意見を交換し、地域の強みや課題を分析し、その成果をディスカッションや発表としてまとめました。この実践的な学びは、グローバルな学びとローカルな実践を結び付け、地域から世界へと貢献する視点を育む経験となりました。





# 海外留学

留学はGLCにおける重要な学びの一つであり、異文化の中で生活しながら、グローバルな視野と人間的成長を促します。現地での学びや生活を通じて、学生は自信や適応力を高めるとともに、多様な価値観への理解を深め、国際社会で活躍するための基盤を築きます。

## アイルランド

中原 綾美 (工学部7期生)

2025年9月より、交換留学生としてアイルランドの大学で情報工学を学んでいます。留学期間が折り返し地点を迎えたところになりますが、ここまでの現地の授業で得たことや大学外での印象的な体験を共有します。

はじめに、大学の授業についてです。私が履修している授業は、1つの授業につき、1週間あた

り講義が2-3時間と実習が2時間で構成されており、実習には、制作や問題演習、ディスカッションなどが含まれています。自分でゼロから何かを制作する過程では、回を重ねるにつれてできるが増えていると感じられます。また、ディスカッションを通して自分になかった視点を得られたときはとても楽しいです。最初の頃は気後れしてしまうこともありましたが、やらなかった後悔は長く残ってしまうと気づいてからは、手を挙げたり、新しい場所に飛び込んだりする姿勢が変わりました。そうすることで、英語に関しても、内容に関

してもどのような形であれ学びを得られるとわかりました。同時に、クラスメイトや先生方といった助けてくれる人がいることも実感しました。加えて、個人的には、授業が終わった際に、学生が先生にThank you!と言って教室を出る文化が、この大学の素敵なおとろだと感じています。日本に比べて少人数の授業であるからこそだとおもいますが、学生と先生の距離が近く、感謝の言葉を自然に伝えられる環境であることは良い点だと考えます。

次に、大学外での体験についてです。9月に情報工学系を専攻する女子学生のコミュニティに入り、先日、企業見学の機会をいただきました。世界屈指のIT企業がアイルランドに欧州拠点を構えていることもあり、そうした企業を訪問してみたいということが、私にとってアイルランドを留学先に選んだ理由のひとつでもありました。そのため、オフィスを自分の目で見たり、社員の方からこれまでのキャリアや海外で働く上で大切なことを直接伺ったりできたことは、自分の将来像を考えるにあたって、非常に有意義な経験となりました。

また休日は、勉強をしたり、友人とハイキングをしたり、アイルッシュミュージックのイベントに参加したりして過ごしています。アイルランドは雨が多く寒いイメージを持たれる方もいるかと思いますが、確かに、そのような天気が芳しくない日が続くこともありますが、その分、晴れた空を見るだけで明るい気持ちになれるのも、ここで暮らす醍醐味だと思っています。

最後になりますが、交換留学を通じて得られる、多種多様な人生のバックグラウンドや将来のビジョンをもった国籍も年齢も様々な人たちとの出会い、また馴染みのない土地で現地の言葉を使って生活を始める経験は、今後の人生の選択肢を広げることに繋がっていると強く感じています。私自身、交換留学をする人が周りに少なく、不安なこともありましたが、海外に来てみると、留学に向けた準備を1年間頑張ってきたと思える瞬間が幾度となく待っていました。少しでも留学に興味のある方がいたら、ぜひ挑戦してみることをお勧めします。



# 海外研修

短期留学プログラムは、GLCの学生にとって、異文化に触れながら実践的な学びを得る貴重な機会となっています。スペインやフィリピンでのプログラムでは、フィールドワークや共同プロジェクト、文化交流を通じて、教室で学んだ内容を実社会の中で活かす経験を積むことができます。以下の学生レポートでは、これらの経験がどのように個人の成長や異文化理解の深化、そしてグローバルな課題への関心につながったかが紹介されています。

## スペイン・バレンシア市

井上 陽菜乃（法学部7期生）

現地では、ファジャス祭りが開催されていて、日本では馴染みのない文化であったため、印象的でした。

カルデナル・エレラ大学では、そのファジャス祭りをマーケティングするというテーマのもとでグループごとにマーケティング戦略を発表しました。ファジャスを初めて体験する私にとって、それを発信するためにできることを考えることは非常に難しかったですが、日本のねぶた祭りが大きなモニュメントが象徴的であるという点でファジャスと似ていることをヒントに考えました。この発表を通して、日本は年間を通して多くの祭りがあり、当たり前のように感じていますが、バレンシアのファジャスについては全く知らなかったこと、祭りがその国の文化的象徴であって人々の繋がりを築きアイデンティティを形成することに気づきました。

バレンシア大学では、私たちが日本特有の文化を表す日本語について紹介し、同様にスぺ



イン特有の文化を表すスペイン語について教えてもらいました。私は、「お世辞」という言葉を紹介しました。特に印象的だったのは、日本語で言う「作り置き」という単語が世界にも存在していて、日本語と同様に、その言葉に親の愛情というニュアンスも含まれた使い方がされることです。

現地でのコミュニケーションは、英語が共通言語でしたが、表情でコミュニケーションを取ることを意識しました。英語だと、伝わらない場面もありましたが、意味を聞きなおしたり、言い換えて確認してみたりして会話をしていました。

このプログラムでは、自身にとって初めての1週間程度の海外体験でした。ですので、日本食や日本の設備、人間性など改めて素晴らしいと思えました。ですが、私たちがファジャスを知らず、スペインの学生がねぶたを知らないように、同じ文化圏で暮らすことは、「日常」を形成しているのであって、これからのグローバルな世界で

は、心地よい日常から抜け出し、様々な体験をしていかなければならないと実感しました。

西村 友香（文学部9期生）

今回の短期留学で最も印象に残ったのは、「英語が通じる前提が通用しない環境」で生活した経験である。現地ではスペイン語が当たり前であり、世界共通語とされる英語でさえ十分に伝わらない場面が多く、自分の考えを伝えるためには言語の正確さ以上に、伝えようとする姿勢や工夫が重要であると実感した。また、大学院生との授業では、受け身でいる限り何も得られず、自分から質問や発言をしなければ議論にすら参加できないという厳しさを体感した。主体的に行動することの必要性を強く学んだ。

さらに、滞在中は足の状態が万全ではなく、思



うように歩けない場面も多かった。そのため、周囲に助けを求める必要があり、実際に多くの人に支えられながら生活した。一緒に旅をした生徒や先生だけでなく、現地で仲良くなった子までもサポートしてくれた。この経験を通して、人に頼ることは弱さではなく、異文化の中で生きるための重要な手段であると感じた。また、現地では周囲の目を過度に気にしない雰囲気があり、自分自身も他人の評価に縛られず行動できたことは大きな気づきであった。

今後は、この経験を活かし、言語や文化の違いに臆することなく、自ら行動し周囲と関わりながら柔軟にコミュニケーションを取っていきたい。

北原 芹夏（文学部9期生）

今回の短期留学で特に印象に残ったのは、日本との文化の違いである。例えば、車のスピードが非常に速いことや、街中に物乞いをする人が多いこと、道にゴミが落ちていることなど、日本ではあまり見られない光景に驚いた。さらに、滞在時期がちょうどファジャス祭の期間と重なり、日本では経験できないような強烈な体験をした。祭りの期間中は、毎日のように爆竹の大きな音が街中に響き、まるで空襲のようだと感じるほどであった。また、子どもが手持ちの爆竹に火をつけて遊んでいても周囲の大人が特に注意しない様子に驚き、日本との安全意識や価値観の違いを強く実感した。

現地の大学生との交流では、彼らがそれぞれ自分の意見をしっかり持ち、積極的に発言する姿が印象的であった。日本人学生と比べてよりラフで自然体なコミュニケーションが多く、相

手の意見を尊重しながらも自分の考えをはっきりと伝える姿勢が見られた。そのような環境の中で、私自身も受け身になるのではなく、自分の意見を伝えることを意識するようになった。

異文化コミュニケーションにおいては、相手の文化や考え方を否定せず受け入れる姿勢を大切にしつつ、自分の考えも遠慮せずに表現することを心がけた。この経験を通して得た柔軟な視点や主体的に発言する姿勢を、今後の大学生活や将来の国際的な場面において活かしていきたいと考えている。

疋田 篤道（工学部9期生）

今回の短期留学で一番大事だと思ったことは、「周りと同じことをしない」ということだ。誤解のないように先に説明しておく、批判的な意味で述

べているのではない。積極性やオリジナリティという意味での表現として書いた。

日本人の特性として昔から集団としての力は強いのだが、集団という輪から外れるのが怖かったり、発言を控えたりする傾向がある。一方で欧米は個人の意見を積極的に表現する文化が比較的強いと感じる。どちらが一概に良いということは難しい。なぜなら、欧米のような精神性では今の私たちの文化は形作られていない可能性がある。日本の文化は協調性を重んじる価値観によって形成されてきた側面があり、それ自体に大きな意義があるからだ。

一番望ましいのは集団の中では協調性があり、個としても自分の考えをもとに言動できることだ。

実際、いろいろな場面で意見などを主張する場面はあったのだが言語が違いということもあり発言を躊躇うことが多かった。なるべく自分自身





では積極的にしよう心がけたが中々難しいところであった。

結論としては、周囲の環境や状況を熟慮して、軋轢を恐れずに自分が正しいと思うことを発言したり、行動できることが今の日本人にとって必要だと認識した。

今回の旅では、特に私はこれはグローバルリーダーとしての絶対的な必要条件である気がした。

高垣 心（文学部9期生）

この短期留学では、短い期間ではあったが、様々な経験をすることができた。私はもともとヨーロッパに住んでいたことがあるため、懐かしい気持ちになると思っていたが、それまでとは真新しい様々な体験をすることができた。特に印象深かった体験は、バレンシアの現地の大学を訪れたことだ。海外の現地校に行くというのは初めての体験で、ドキドキしながら教室に入り、自己紹介の時に物珍しそうにこちらを見つめる目、キラキラした目、前に立って様々な目と自分の目が合った。グループの中に入ると、元気な女の子たちが迎えに来てくれた。お互いに英語は第一言語ではないため、最初は言葉の壁に戸惑い、うまく会話が続かない場面もあったが、相手の話をしっかりと聞き、分からないことは正直に聞き返す姿勢が、信頼関係を築くうえで大切だと実感した。

また、日本との文化の違いにも多く気づかされた。例えば、初対面でもフレンドリーに接してくれ、気軽にカフェやごはんを誘ってくれる雰囲気

は、日本とは異なる点だ。私は現地で、相手の文化や価値観を否定せずに受け入れること、そして自分の考えも遠慮せずに正直に伝えることを心がけた。日本語を勉強している子が私にこの日本語があっているか、どういう感覚で使っているかなど質問してきてくれた時は、私自身の正直な回答を伝えた。このような異文化コミュニケーションの中で、違いを楽しむ姿勢の重要性を学んだ。

今後は、この経験を活かし、異なる背景を持つ人々と積極的に関わっていききたい。今回の短期留学は、自分の視野を広げる貴重な機会となった。

北里 優（文学部9期生）

この短期留学で印象に残ったことは、初めて授業で学んだマーケティングの面白さである。英語での授業であったが、日本にも共通する考え方が多いと感じた。特に、祭りの展示を行う美術館を訪れ、マーケティングの視点から改善点を考える授業では、実際に足を運ぶことでしか分からない課題に気づくことができた。例えば、中心街から距離があることや展示品の配置など、訪問者の視点に立つことの重要性を実感した。また、電話でのやり取りの練習を通して、会話では自分が話すだけでなく「相手に話させること」が大切であると学んだ。

この姿勢は異文化コミュニケーションにも通じている。世界各地から集まった学生と交流する中で、相手の話に興味を持って聞くことが、より深い

コミュニケーションにつながると感じた。私は事前にファジャスという祭りについて調べていたことで、背景や文化について理解を深めながら会話することができた。さらに、全体的な街並みや交通ルールの違いにも触れ、スペインの魅力と同時に、これまで住んできた日本の良さも感じることもできた。

今回の経験を通して、相手を理解しようとする姿勢と、自分の意見に自信を持って伝えることの重要性を学んだ。今後はこの学びを活かし、異文化の人々と積極的に関わっていききたい。また、この留学をきっかけに新たな言語学習への意欲も高まったため、将来の学びや進路に結びつけていきたい。

江口 ひかり（文学部9期生）

今回の短期留学で私がいちばん印象に残ったのは、現地の大学生とプレゼンを考える場面で、自分の英語力の不足を感じたことである。日本から来た参加者として、日本の視点からアイデアを出したかったが、その場で即座に英語にして発言できず、チームメイトから頼りにされるに戸惑ったことに悔しさを感じた。頭の中にアイデアがあったとしても、即時に伝えられないもどかしさと、自身の英語力の未熟さを痛感する機会であった。しかし同時に、異文化コミュニケーションにおいて大切なのは、まず笑顔で挨拶し、自分から心を開く姿勢だということにも気づいた。言語に自信がないからといって遠慮していても、相手から話しかけてくれるとは限らない。だからこそ、自



分から相手に興味を持ち、一步踏み出して関わろうとする姿勢が重要だと実感した。完璧な英語でなくとも、最初はみんなそうだから、とチームメイトに励まされたことも強く心に残っている。この経験を通して、今後は英語力を伸ばすだけでなく、英語で会話することを恐れない度胸も身につけたい。また、英語以外の言語にも挑戦し、より広い視野で異文化に向き合えるよう成長していきたいと考えている。

田中 鈴乃（法学部9期生）

私が今回のスペインの滞在中に最も印象に残ったことは、バレンシア大学とCEUでの授業である。バレンシア大学の授業では、日本特有のフレーズについて紹介した後、世界各国からの学生からそれぞれの国特有のフレーズを紹介してもらった。また日本語で学生の名前を書くと、とても喜んでくれたことが印象に残っており、私自身も嬉しく感じた。その後もバレンシア大学の学生と街を散策したり、ランチを共にしたりする中でとても良い関係を築くことができた。

一方で、翌日のCEUでの授業は全く異なるものであった。現地の学生はマーケティング専攻の大学院生であり、授業のレベルは非常に高く、内容を英語で理解することで精一杯であった。そのためとても自分の意見やアイデアを発言することは出来ず、自分のコミュニケーション能力や英語力の不足を痛感した。

しかし、このまま授業を終えることに悔しさを感じたため、数名で話し合い、どのようにすればグループの一員として関わることができるか考えた。後日のマーケティングに関するロールプレイでも内容の理解に苦戦したが、何とか無事終えることができた。

これら2つの大学での授業を通して、コミュニケーションの楽しさと難しさの両方を実感した。特に、グループの中で自分の意見を英語で的確に伝えることの難しさを強く感じた。今回の体験を今後のグループ活動に活かし、思考力や英語力の向上につなげていきたい。

有満 結月（文学部9期生）

私にとって今回のこの短期留学が初の海外



でした。この経験を通じて私が一番感じたことは、自分が思っていたほど言語の壁はなかったということです。もちろん円滑なコミュニケーションをとる上で言語力はあるに越したことはありません。私はグローバルリーダーコースとして英語を学んでいますがこれまで正直語彙力には自信がありませんでした。今回の留学に行くと決まってもスペインの人に自分の言葉で話が通じるのか不安でした。スペインに着いてから初めて自分で英語を話したのは昼食の注文でした。日本では何も考えずにしていることですが外国で、違う言語となると注文一つでも緊張したことを覚えています。しかしいざやってみると思ったより平気で、店員さんの対応も日本よりもフランクで、授業で学んだsmall talkを体験しました。少しずつ話すことのハードルが減っていった3日もすれば現地の方との会話を楽しめるよう

になりました。時には話が通じないこともあります。しかし、相手も一生懸命に私の言いたいことを聞き取ろうとしてくれて私ももっと英語を勉強しようと自発的に思うことができました。実際に行って経験したことに勝るものはありません。このスペインでの体験が、私にもっと海外への興味を持たせてくれました。また機会があれば行きたいです。その日までもっと勉強をして実践できるように備えておきます。

現地で心掛けた異文化コミュニケーションは相手の容姿についてです。日本では痩せていることが美の基準、目が大きいと可愛い、といった見た目に関する話をする人が多いと感じますが、ですが海外ではかえって気を悪くしてしまうこともあると耳にしたことがあったので、気安くその話題を持ちかけないようにしました。



歴史と文化を学ぶため、市内の観光地を回りました。

3月8日(日)に、Aloguinsanでコミュニティイマージョンを行いました。生徒たちは、サステナブルなエコツーリズムや、水・電気・食料といった生活必需品の供給源が乏しい島での生活にまつわる課題について学び、サステナビリティ評価活動を行いました。AloguinsanからHermit's

Coveまで船で移動し、コミュニティイマージョンやサステナビリティ評価活動などを行いました。その後、Tuburanに移動しました。

3月9日(月)にTuburanでコミュニティイマージョンを行いました。コーヒー農家を訪問し、農家の方々とインタビューをしながらサステナビリティ評価活動も実施しました。

3月10日(火)の「Global Leadership/Entrepreneurial Mindset Session」では、学生たちが「Design Thinking Approach」と「Prototyping」を用いて、グローバルな課題とその解決方法について学びました。このアプローチは、訪問したAloguinsanおよびTuburanのコミュニティが直面するさまざまな問題の解決にも応用されました。

3月11日(水)の「Sustainable Energy, Water and Waste Management」セッションでは、エネルギー、水、ごみに関する地域の課題と解決方法について学びました。

3月12日(木)には、サンカルロス大学のサステナビリティに関する取り組み内容などについて、ご紹介いただきました。午後は自由時間となり、セブ市内の観光などを楽しみました。

とても素晴らしいプログラムで、学生にとっては良い経験になったと思います。

3月13日(金)、予定通りに、参加者の皆さんが無事に日本に到着しました。

#### 参加者からのコメント

「この研修では、サンカルロス大学の学生と交流しながら、文化やSDGsについてセブでの様々な体験を通して学び、英語によるコミュニケ



ーション能力の向上を図ることを目的としている。実際に現地の学生と直接交流することで、教室で学ぶだけでは得られない経験をすることができた。」

法学部1年次 菅村 和花

「現地の学生や地域の人々が自分たちの地域課題に対して強い問題意識を持ち、解決に向けて主体的に取り組んでいる姿である。トゥブラン・コーヒー農園では、コーヒーの収穫体験や農園見学、地域住民との交流を通して、自然と共存しながら生活している様子を直接学ぶことができた。特に、現地の大学生が地域の環境問題や社会課題について真剣に考え、研究や活動につなげている姿勢が印象的であった。」

法学部1年次 田代 愛奈

「現地の学生と交流する機会が多く、一緒に買い物をしたりゲームをしたり、SDGsに関する新しい製品を考えたりする中で、リスニングやスピーキングなど英語の能力が向上するのを実感できた。また、化学関連のプレゼンテーションでは、膜技術など熊本大学で学んだ知識を活かしつつ、フィリピンのPSDMのような技術についてより深く学ぶことができた。」

工学部1年次 原田 佳洸

「現地でのコミュニケーションを通して、英語は難しい表現でなくても、簡単な文章でも十分に伝わること、そしてはっきりと発言することの大切さを学びました。実際に積極的に話しかけること



## フィリピン・セブ島

SDGs Heart-to-Heart Talk in Cebu

2026年3月6日から13日までの間(移動日を含む)、サンカルロス大学(セブ島、フィリピン)において、短期海外研修プログラム「GLC専用 Academic Foundations (a): SDGs Heart-to-Heart Talk in Cebu」を実施しました。

この「SDGs Heart-to-Heart Talk in Cebu Program」は以下の内容で構成されています。

3月6日(金)に福岡国際空港に集合し、セブ島に向かいました。

3月7日(土)には、セブ市内の文化遺産群を巡りました。両大学の学生と交流しながらセブの





で会話が広がり、自身にもつながりました。さらに、「Kindness is free」という言葉に触れ、思いやりの心が言語の障壁を超えて思いやりの心が人と人をつなぐことを実感しました。」

工学部1年次 樽谷 暢人

「実際に海外短期留学に参加し、現地の人々と会話することで、自分の言語面での課題が明確になりました。また、教科書では学ぶことのできない、現地ならではの俗語や新しい単語を知ることができました。」

工学部1年次 吉田 悠真

「今回の経験を通して、日本では地震などの自然災害への関心が高いのに対し、フィリピンでは島国であることから水資源への関心が高いと感じた。地域ごとに抱える課題が異なり、それに応じた持続可能な取り組みが行われていることを学ぶことができた。」

工学部1年次 本郷 星七

「今回は言葉だけでなく笑顔やジョーク、身振りで別れを惜しむほどの関係になれたことは私の一年間の大学生活の学びの集大成であったように感じました。」

この活動を通して異文化の人々とのコミュニケーションが上達したとともに、環境を守りたいという簡単な言葉で表現していたこの言葉にとても大きな衝撃や意味を持たされたとても貴重な体験となりました。」

工学部1年次 木下 皓士郎

「この場面一つからも、フィリピンの人たちは自分たちの行く道を自分なりの行き方で進み、また周りは非難するわけではなく、ときに行先を指し示すだけであり、相手を尊重した伝え方をしているのだと考えることができました。加えて、今までの自分の考え方を内省し、他人の指摘に過度に左右されることなく、また他人の生き方を尊重するような振る舞いをしようとするようになりました。」

工学部1年次 豊坂 蓮斗

「今回の経験から、真のグローバル化とは世界中を同じ価値観にすることではなく、互いの違いを尊重しながら共に生きていくことだと感じました。今後も異なる文化や価値観に出会ったときには、理解しようとする姿勢を大切に、この経験を



国際的な視野を持つ行動につなげていきたいと考えています。」

法学部1年次 市川 青空

「これからは、日本でも留学生に積極的に話しかけたり、一緒に遊びに行ったりして交流を広げていきたい。そして、今回の短期留学で学んだことを今後の生活にも生かしていきたいと思う。」

工学部1年次 野田 結世

「今後の海外経験だけでなく、熊本大学に留学生を迎える際にも、相手の言語で歩み寄ることによって深い信頼関係を築く一助になると確信している。」

工学部1年次 小山 颯太

「今回の経験は日本では絶対に得られないようなとても大きなものでした。普段とは文化や言語が違う地で生活してみて、苦労する部分もありましたが、それを上回る楽しい思い出ができました。これから海外も人と接する際に、文化や言語の違いを理解して接しようと思いました。また自分のように海外から日本に来た人がいれば話しかけてみたいと感じました。」

工学部1年次 大畑 真翔

「今回の経験から異なる環境や文化を持つ人々と交流することで新しい発見や成長を得られることを学んだ、帰国後も留学生や外国人に積極的に話しかけ、国際的な視点を持つ姿勢を大切にしていきたい。」

工学部1年次 古海 秀樹

「今回の短期留学を通して、世界にはさまざまな社会問題があり、それに対して多くの人々が解決策を考えていることを学んだ。この経験を通して、SDGsについてより深く考えるきっかけとなり、今後も国際的な視点を持って社会問題に関心を持ち続けたいと思う。」

工学部1年次 富永 千尋





創造 超森 挑戰 超炎

